臙の獨立、一八三〇—四一の東方問題、クリミヤ戰爭、ルーマニヤ國の成立、露土戰役前後の經過を歷叙し、進んでバルカン諸國の實狀、新勢力獨逸の近東政策、マセドニヤ問題青年土耳古黨の革命運動を論じ、引き續いてバルカン同盟、バルカン戰爭より一九一四—一六の最後の戰亂に說き及ぼせり、卷中處々に肝要なる地圖を示し且つ附錄に土耳古及バルカン諸邦國の君主系統表及最近百年間に於ける土耳古の版圖並に人口統少表を擧げたり。土耳古の國運、バルカン問題の推移を簡便に知らんとするものゝ爲には甚だ有益なる著書なるべし。〔與上植村〕

◎日本石器時代人民遺物發見地名表（東京帝國大學發行）

我が國に於ける石器時代の遺跡遺物の發見地を表記して、考古學的研究に多大の便宜を與へたる東京理科大學人類學教室編纂の「日本石器時代人民遺物發見地名表」は、明治三十四年第三版を出してより久しく改版增補の事なかりしが、今回柴田常惠氏專ら事に當り、大に補訂を加へ第四版を發行せるは斯界年來の希望を滿せるものと云ふべし。本書は增補の爲め、紙數五百頁に近く、收むる所の遺跡總數が五千を超ゆ、第三版の三千一百餘に比すれば其の增加著しきを見るべきなり。殊に畿內、山陰道、九州等の從來比較的遺跡の少かりしに地方に於て增加の大なるあるは研究上注意に値する所なり。編纂の體裁は畧ぼ第三版に等しきも、今次の出版に際しては、發見地排列に就て最も見易き畿內七道の順を採り、新に樺太を加へ又檢索に便ならしむるに意を用ゐ、又重複記事の訂正に注意し、前版に於ける誤謬を訂せることの著しく認めらるゝは最も喜ぶべし。方今石器時代研究の機運の盛んなる時に當り本書の出版は研究者のため好伴侶を得たるものと云ふべしたゞ望蜀の感を云はゞ故坪井博士のコロボックル論を卷頭に載することは本書の由來上必要の事とするも、其の後、石器時代の人種に關する諸方面の研究著しく進歩し、博士の時代に比するに斯界の面目一新の有樣なれば、之に關する研究の梗概なりとも附載せられて可なるべく、又前版まで追記に供する爲の卷末の餘白紙は新版にも加へらるべかりしこと是なり。（價一、二〇　丸善發賣）

〔梅原〕

◎武相鄕土史論　日本歷史地理學會編

大正五年十月より同六年四月まで前後十一回に亘りて催されたる横濱地理歷史研究會の講演筆記に校訂を加へて出版したるものにして、「上代の武相」（文學博士喜田貞吉氏）、「鎌倉武士」（八代國治氏）、「後北條氏の武相經營」（文學博士田中義成氏）、「ウイリアム・アダムスと江戸時代初期の西洋交通」（文學博士辻善之助氏）「米使ペリーの渡來」（文學士岡部精一氏）、「ハリスの渡來」（文學士大塚武松氏）、「城郭の變遷と武相」（文學博士大類伸氏）、「江戸

灣の海防史」（文學士藤井甚太郎氏）、「鎌倉武士の學問修養」（鷲尾順敬氏）、「劇に現れたる鎌倉武士」（文學士堀田璋左右氏）、「鎌倉公方と室町幕府」（文學士渡邊世祐氏）、「武相の古美術」（文學士福井利吉郎氏）、「武相の古文書」（文學博士黑板勝美氏）等あり。加ふるに卷頭二十一葉の寫眞版を添へて本文との參看に資し、附圖として武相史蹟地圖一葉を附せり。彌版五〇二頁（仁友社發行、價、二〇〇）〔中村〕

◎雜誌

◎我國に保存せられたる古代土耳其文字　文學士　中目覺

（「尙古」第七十一號所載）

北海道小樽手宮の洞穴內の岩石に見る文字樣の彫刻に就いては大正二年、鳥居龍藏氏が、之れを以て古突厥文字にして、其言語はツングース語なるべしと述べしことありしが、著者は露西亞のラドロフ氏の「蒙古に於ける古代土耳其文存」の著を讀み、其文字が手宮の彫刻と類似するを見るに及んで、遂に是等の比較研究を企て、手宮彫刻は古代土耳其文字にして其文字の或るものは之れを横に書けるものもありと判定し、更に其言語に於ては北海道の對岸に位せしトングース人の言語なるべしと推測して、之れを「グルーベ著ゴルデ語集」に求め、手宮の文字樣彫刻を、奉ゐる。大海。闖ふ。入る。の語なりと判讀し、全文の意は「……我は部下を率ゐ、大海を渡り……闖ひ……此洞穴に入つた……」ならんと指定せり。此言語は滿洲語とオロッコ語との中間に位し、東トングース語に屬するものにして、烏蘇里地方の住民の言語なるべく、著者は之れを韃靼語と名け、手宮彫刻は、さきの意味を古代土耳其文字を以て書ける韃靼語の文章なりと言へり。〔西田〕

蒙古襲來に就ての研究　八代　國治

（史學雜誌第二十九編第一號所載）

文永弘安の役に關して新に世に出でたる勘仲記原本、弘安四年日記抄、異國御祈文書等の史料に基き研究したるものなり。其中文永役に關しては其來襲を十月十三日なりとし、大友頼泰の部下が賊徒五十餘人を捕虜とし、之を具して上洛せりとの新事實を述べ、幕府の異國征伐については鎭西、中國の武士の外、大和國の寺僧と國民とを徵發して頗る大規模に企てられたりと推し、弘安役については賊船は五月廿二日對馬壹岐を侵略し進んで博多沿岸に迫りしが、同時に別隊として多數の船艦を送りて長門沿岸を攻擊したりし事、六月中旬に至り再び敵の船艦對馬島に來着し、更に博多を侵せし事等を述べ尙、捕虜の待遇、戰爭の中心地に論及し、更に身を以て國難に代らんことを伊勢神宮に祈願し給ひしは